

ツバキ，サザンカの生産の現状と技術的課題

福岡県農林業総合試験場
資源活用研究センター
苗木・花き部

井樋 昭宏

はじめに

ツバキ，サザンカは，庭木や盆栽だけでなく，茶道，華道などの文化や，材木，椿油などの生活利用など，古来から日本人と関わりの深い花木である。江戸時代には，各地で盛んに育種が行われ，様々な特徴ある品種群が登場するようになり，広く園芸品目としての関心が高まった。明治時代以降は，茶道，華道での利用が主であったが，戦後の世界的なツバキブームの影響を受け，日本でも1960年代から再び人気が高まった。その後，香りツバキ，黄色ツバキ，原種ツバキと，新しい遺伝資源が話題となる度に注目を集め，さらにそれらを交配に使った新品種も続々と登場した結果，現在では日本産のツバキ，サザンカの品種数も1,200種以上（日本ツバキ協会 2010）と非常に多い。特にツバキ，サザンカ品種は，花の形質（花型，花径，花色など）の変異が豊富であることから，愛好家の



図-1 花型，色の変化に富むツバキ品種
左上：月の輪
右上：玉ありあけ
左下：マーガレットデイビスピコティ
右下：初黄

品種収集による鉢物需要が多い（図-1）。

ツバキ，サザンカを生産体系

今回紹介するツバキ，サザンカを生産については，現在，園芸品種栽培の主流となっているコンテナ栽培に限定し，福岡県の事例を紹介する。なお，コンテナ栽培ではサザンカも同じ生産体系で栽培しているため，以下，生産に関しての「ツバキ，サザンカ」を「ツバキ」と表記する。

(1) ツバキ生産の特徴と施設

ツバキ生産に関して，表-1に，平成25年のツバキ作付面積，出荷数量，出荷額，栽培農家数の全国上位5都道府県について示した。作付面積，出荷数量，出荷額において千葉県が1位であったが，栽培農家数は3位と，主要産地の中でも1戸あたりの作付面積，出荷数量，出荷額が大きいことがわかる。福岡県は，いずれの項目においても2～3位となっており，全国における主要な産地のひとつである。

図-2に，全国と福岡県についての平成15年から25年までのツバキ出

荷額と栽培農家数の推移について示した。出荷額は，全国では平成16年の2,003百万円をピークに平成25年では546百万円と3割弱にまで減少し，福岡県においては平成15年の545百万円から平成25年の74百万円と大きく減少した。平成22年の急激な落ち込み後は，ほぼ横ばい状態で低く推移し，全国におけるシェアも1割前後の額に留まっている。栽培農家数は，全国では平成15年の2,700戸から平成25年の1,374戸とほぼ半減しているが，福岡県は，平成16年の305戸をピークに緩やかな減少傾向を示し，平成25年では260戸となっている。福岡県の出荷額の推移からみて，1戸あたりの出荷額がこの10年で大きく減少したことがわかる。

生産体制は，人気の高い品種やホームセンター向けの生産で多い「セット販売」で出荷する品種については一定量の苗を生産するが，基本的に少量多品種生産である。出荷苗は，2～3年生苗がほとんどである。

栽培には，ガラスハウスかビニルハウスの雨除け施設が必要である。鉢上げ後から出荷までの殆どの期間は周年

表-1 平成25年度ツバキ作付面積，出荷数量，出荷額，栽培農家数の上位5都道府県
農林水産省花木等生産状況調査

順位	作付面積 (a)	出荷数量 (千本)	出荷額 (千円)	栽培農家数* (戸)
1	千葉 2,887	千葉 329	千葉 138,490	神奈川 500
2	福岡 2,258	東京 220	埼玉 94,603	福岡 260
3	東京 2,140	福岡 120	福岡 74,305	千葉 196
4	鹿児島 1,449	埼玉 110	東京 49,880	埼玉 172
5	神奈川 1,296	愛知 94	三重 48,027	三重 48

※栽培農家数が不明な都道府県は除く

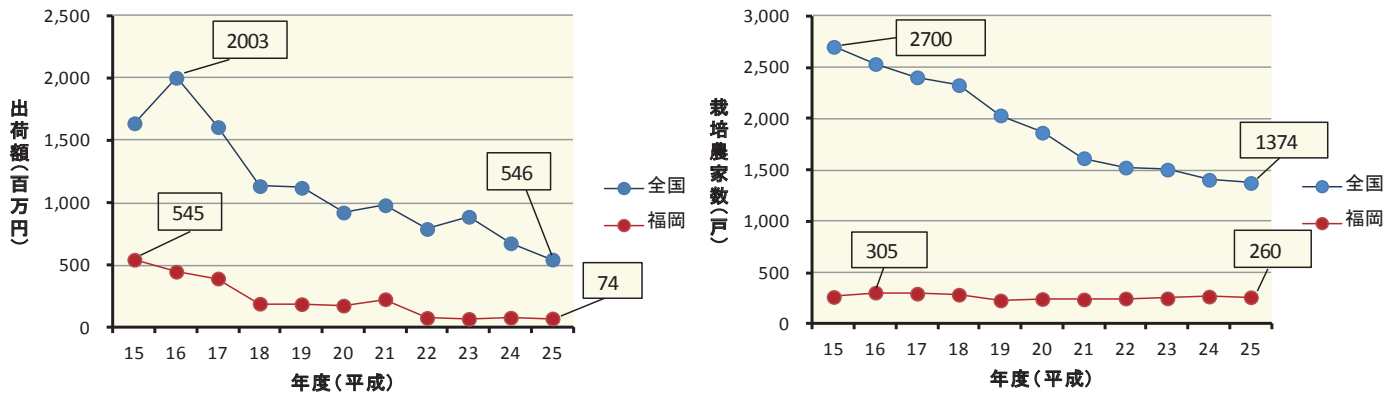


図-2 全国および福岡県におけるツバキ出荷額、栽培農家数の推移
(農林水産省花木等生産状況調査より)

遮光率 50%程度の寒冷紗で被覆栽培する。基本的に加温施設は必要ないが、出荷時期を早める場合や熱帯原産のツバキなど寒さに弱い品種を栽培する場合は必要である。また、挿し木用にミストハウス（遮光率 50%程度）か雨除けハウス（遮光率 70%程度）が必要である。施設利用面積率は 6～7割程度である。

(2) 栽培の実際

図-3 にツバキの栽培管理について、挿し木 3 年生苗を出荷するまでの作業過程を年度別に示した。なお、ツバキ生産の多くは挿し木繁殖である。しかし、挿し木発根が困難なごく一部の品種の増殖や、穂木を多く確保するために生育促進の目的で接ぎ木繁殖を行う場合もある。

1) 挿し木

挿し木時期は、6 月下旬から 7 月中

旬（梅雨挿し）である。新梢伸長を停止し、硬化した春枝から採穂し、葉を 2～3 枚着生させた状態で調整した穂木を 20～30 分間水揚げする。発根促進剤は、現在はほとんど使用していない。挿し床の用土は、ボラ（小粒）とピートモスを 4 対 1（容積比）で混合したものを用いる。

2) 挿し木後の管理

挿し木後の管理は、ミストハウスの場合は、遮光率を 50%とし、日中 30分に 30 秒間のミストかん水を行う。手かん水の場合は、遮光率を 70%とし、最低 1 日 2 回かん水を行う。

病害虫防除は、気象状況や病害の発生状況に応じてではあるが、月 1 回程度実施する。

なお、育苗箱で生育した鉢上げ前の苗の状況を図-4 に示した。

3) 鉢上げ

鉢上げは、挿し木後 6 カ月を目途に 12 月上旬から 1 月上旬に行う。少なくとも翌春に葉芽が伸長を開始する前に実施する必要がある。鉢上げ後の苗の様子を図-5 に示した。

鉢上げは 9cm 径のポリポットに行い、用土は、ボラ土とピートモスと鹿沼土を 8 対 1 対 1（容積比）で混合したものを用いる。ピートモスの比率をやや多めに混合する場合もある。

4) 鉢上げ後の管理

鉢上げ後は、遮光率 50%程度とした（雨除け）ハウスにおいて、トレーに入れてベンチ（エキスパンドメタル台）上で管理する。かん水は、4～10 月は最低でも 3 日に 1 回、11～3 月は 1 週間に 1～2 回とする。

施肥は、活着後にマグアンプ K を 1 鉢あたり 1.5g 施用する。

病害虫防除は、春から秋にかけ適宜

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 年目			遮光 挿し木		防除	防除	防除		鉢上げ	施肥		
2 年目	防除	防除		防除	防除	防除	防除		鉢替え	施肥		
3 年目	防除	わい化剤 防除		防除	防除	支柱立て	防除	施肥		出荷	遮光	

図-3 ツバキ栽培暦



図-4 育苗箱の挿し木個体（鉢上げ前）



図-5 挿し木1年後の苗の状態（6月撮影）

実施する。風通しを良くし、病害発生
の予防に努める。害虫では、アブラム
シ、ハマキムシ、チャドクガ、スリッ
プスおよびホコリダニに注意する。

5) 鉢替え

鉢替えは12月上旬から1月上旬（鉢
上げ後1年後）に、鉢上げ時と同じ
用土を充填した12cm径のポリポッ
トに植え替えて行く。鉢替え後の状態
を図-6に示した。この状態の苗が生
育し、蕾を付けた状態の3年生苗が
出荷苗である。

6) 鉢替え後の管理

鉢替え直後にマグアンプKを1鉢
あたり3g施用する。

草丈の伸長を抑制し、着蕾を促進さ
せるために、バウンティフロアブル
500倍希釈液を1回葉面散布する。

10月に支柱を立て、伸長した枝を
誘引する。

7) 出荷

出荷盛期は1～2月である。出荷
苗の品質基準として、ヤブツバキ系品
種では着蕾数を3個以上確保する必
要がある。

技術的課題

(1) 現在の栽培体系における課題

以上、栽培の実際を紹介したが、現



図-6 挿し木2年後の状態（6月撮影）
左：株近影，右上：ハウス全体，右下：栽培近影

在の栽培体系では、生産上大きな問題
となるような技術的課題はないものの、
いくつか検討すべき点がある。その中
でも、出荷苗の着蕾数の確保と一部の
品種の挿し木発根率の向上の2つの課
題は、懸念事項として挙げられる。

1) 着蕾数の確保

着蕾数の確保のために、鉢替え後の
4月にバウンティフロアブル500倍
液を散布しているが、品種によっては、
目標とする3個の着蕾数が得られな
い場合がある。散布のタイミングとし
ては、図-6（6月撮影）の2カ月ほ
ど前の時期になる。密植状態であるこ
とが花芽の着生に影響を及ぼしている
ことも考えられるが、より安定的に着
蕾を促進できるような散布方法の検討

が必要である。

2) 挿し木発根率の向上

挿し木発根の問題については、実際
には、発根率が低い一部の品種につい
ては生産していないのが現状である。
技術的には、オキシベロンなどの発根
促進剤やミスト装置の利用により改善
される場合が多い（町田 1974）とさ
れている。しかし、トウツバキ系の品
種など非常に発根が困難なものは、こ
れらの手法だけでは発根促進の効果は
得られないようである。今後、穂木の
条件、挿し木環境および発根促進剤の
利用方法を検討することにより、安定
した高い発根率を得られる挿し木方法
の開発が望まれる。

(2) これからの課題

ツバキの需要拡大に向けての新たな取り組みが必要とされている中、ここでは、苗の出荷時期の拡大と海外への輸出について述べ、それに伴う技術的な課題について若干触れたい。

1) 出荷時期の拡大

早咲き性のツバキ品種は販売の面からみて有利性があると考えられる。実際の生産では、早生系の品種の選択やハウス内の温度を高めることにより早期出荷する方法も有効であるが、ジベレリンを利用した早期開花を図る方法もある。

ツバキは、9～10月に花芽の形成が終了するが、その時期に花芽にジベレリンを処理すると開花促進が図られる。1960年頃よりアメリカにおいて、花蕾脇の葉芽を折り取り、その跡に10,000ppmのジベレリンを滴下する方法が試みられた(Wilson 1966)。その後の研究で、エタノールに溶かしたジベレリンを花蕾に塗布する簡易な処理方法も検討されている(富田・植松 1983)。処理効果は、品種ごとに異なることに加え、処理時期や温度による影響があることから、現在は生産現場では利用されていないようである。今後、安定的に簡易に処理可能な

方法が確立されれば生産上有効な技術となると考えられる。

2) 海外への輸出

樹木の海外への輸出は、新たな需要創出という意味で注目されているが、植物検疫における線虫対策、長期輸送対策など、様々な技術的な課題がある(千葉県農林総合研究センター 2012)。これまでの中～大木の地植え樹の輸出においては、線虫対策のために根洗いや根圏への資材の再充填などの多大な労働力を伴う作業が必要であった。しかし、ツバキのコンテナ栽培では、適正に殺線虫処理された土壌を用いることにより、従来の線虫対策にかかる労働力は必要ないと推察される。

一方、コンテナ苗は、樹体が小さいために長期輸送耐性が低いと考えられ、輸送前に耐性を付与する処理を施す必要があると考えられる。これにはストレス耐性と関係があるアブシジン酸の生合成に関与するユニコナゾールPなどの植物成長調節剤の利用などが考えられる。

さいごに

ツバキ生産を取り巻く環境は厳しく、長引く景気の低迷により消費が落ち込み、消費者の嗜好も多様化してい

るため、生産者は、品種ごとの計画的な生産が難しく、さらに全体の売り上げを向上させることが非常に困難な状況にある。現状の個別の課題の解決も重要ではあるが、それだけでは、大きな生産振興は難しく、需要創出のための新たな取り組みが必要である。それに伴い新たな技術的課題も発生するが、多くの課題解決において、植物成長調節剤の適正な活用が重要なポイントであると推測される。

今後の植物成長調節剤の活用の幅が広がることが期待される。

引用文献及び参考情報

- 浅田隆之ら 2007. ユニコナゾール-Pによるユーカリへの環境ストレス耐性付与とアブシジン酸代謝への作用. 日本森林学会大会発表要旨 D23.
- 千葉県農林総合研究センター 2012. 植木・盆栽類の輸出マニュアル, 18pp.
- 町田英夫 1974. さし木のすべて, 211p
- 日本ツバキ協会 2010. 最新日本ツバキ図鑑, 359pp.
- 富田広・植松盾次郎 1983. ツバキ属の生育・開花に関する研究(第2報) Gibbing(塗布法)による開花期の前進. 埼玉園試研報 12, 35-40.
- W.F. Wilson, JR. 1966. Gibberellic acid concentration for Camellia. American Camellia Yearbook, pp.194-199.